

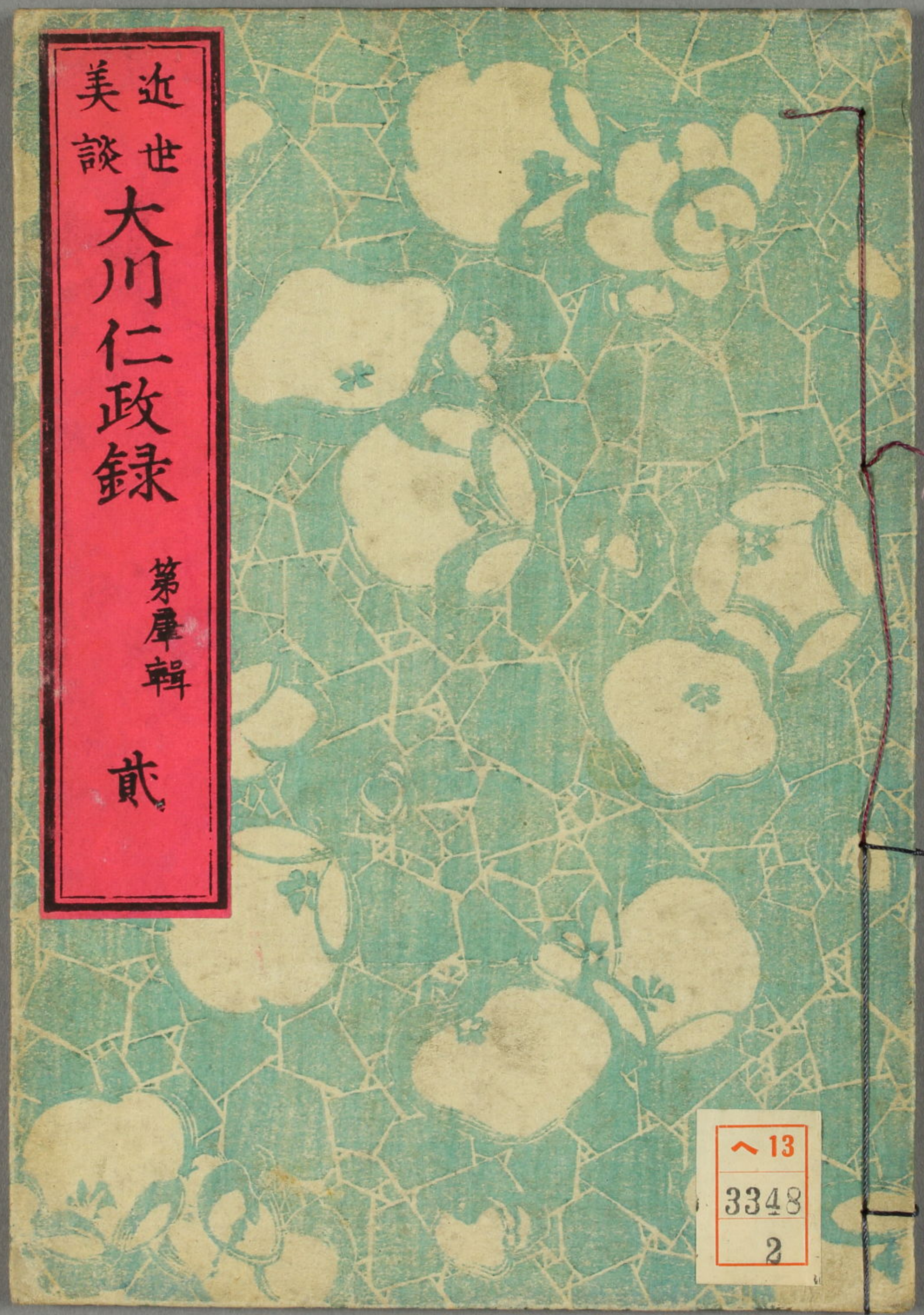


近世
美談

大川仁政録

第肆輯

貳



~ 13
3348
2



門 へ 12
3348
卷 2

近世 美談 大川仁政録厚輯卷之二

松亭主人 著

大正十年八月廿九日
本大學出版部 贈

喜八於棋奇縁と結話

陰陽和順と萬物と生と男女和合と子孫榮久と開く君子
の道は和と以貴とんぞ其録府の喜八は初一念達と今宵俠
夫条八が縁々不因て彼於棋と同席と今日見初一処より髪
結床又於委しく聞合當家の主人と俠客と聞て紐りく彼百
金と投歩て責て一夜の枕とかりとあせよ思ひ置更きく現世の
思ひ遂ち此命と果らん覚悟と決りたる趣と以心の底にお
明て物語をれば於梅も其志の切なりと嬉しく妾がごとし賤

大川仁政録厚輯卷之二

く不束なる婦と左程も思ひ賜りて真実誠心毎の世ふらふ志を
侍らし世も妻も宿業悪く疾く父母ふも親族さへも
孤獨ゆへ曳手後の其中に取分今の男名も人胴脉の熊吉といふ
溢者父母存在昔言号の約束有と妻が知ぬる物の物と證
拠なく音家へ無理小躍込衣服諸雜具ハ勿論家郎田畑追
も賣代とち胸樂博奕も皆無とせし其上無理好色も及
んんとりて否む度々撃懲されても帶紐と解ぶこれが為折々
ハ鬘と擲んで曳摺廻されその撃亦擲生疵の絶る間とてハあく
泣も泣も身の因果近隣の人々取推へ挨拶され何ゆへ小
折檻の妨も及ぶ定めて吾他出勝ゆ竊も密通小及ぶゆへ愛者依

怙ゆへの妨も及ぶと却て逆捨ゆ誰が壹人取推へ引分異
る人もさく刺力量飽まても強く強情此上う死悪黨者ゆ今日
や縊ま死する立や淵河へ身と没んうと幾般り井の辺へ立より
飛込んうと父の事と思ひ母の臨時の遺言と思ひ出て死な
も死あれぬ此身の因果然る処思ひもうと遠く鎌府の御
身ふかく悪醜なる妻と夫程も迫思ひ給りて実意の程り身
娛りかりけしん有難き御身小随て夫婦と成て末長と睦ま
どく暮り度わり人侍ととも妻が身小添る悪因縁の熊吉後日
のいり形も仇も成ぬらん尤表向い妻とら負あれど妻が心も熟
心ぞ帯紐解絲が夫婦とらと夫婦も非ざれば厭りぬやうは

思ひんぶきども執念深き悪黨者ゆへ御身と階老の契と結び夫
 婦と成しと厚を假令火の中水の底迫り索ね来つて仇と成べ
 りの必定るれば妾ゆへは御身又僕ちとせめて妾の道立を設ひ帯
 紐と解ども心と心の契と結び御身の厚き情真実と聞けり
 肌と合さばとも階老同士の夫婦と思ふが責くよの心ゆへに迎も漆
 透られぬ因果の寄合奇縁とありぬ給りて迎も此世小生
 存ても詮る身妾が百年の命と以て君ごころひの情は酬ん心
 の覚悟あよひ必と淵河へ身と没て此世の苦患と助りに假令
 こよひ限のりせなうも未来の永々夫婦の契りと願する万乞
 妾死せしと聞給りて一偏の廻向吊いと願ひん入るといふ喚と泣き

処と口小袖と當喜八が膝ふ移て泣沉るるど道理もなかり喜
 も於梅が段々の入訳泣口説と聞又悲しく共又杖と絞つ其心
 底と聞思ひへ吾も同ト更迎も漆まぬ中よまば活て詮る此身
 の上休が其覚悟を吾も共死出三途の道と手で度て往
 社此身の本懐をういさゆべ共身と淵川へ待暫責く國元
 の主人鎌倉の支配人善兵衛厚く世話まほ礼の一言又へ吾
 生國上刃豊岡村の妙二筆の遺書認んと涙又鈍漆筆の頭
 死ると覚悟究り喜八が思ひ筆の道と後や前と兼り
 兩人が歎きと一間のこころ不聞あつる条八夫婦若く時の思ひ引
 競べ尤も思ひん尤あつと隔紙引明条八喜八於梅は向ひ過刻

遂一始終不殘聞しりさやどふ近思ひりふる兩人が誠を聞て誰う
 衣と思へさるる死兩人とも必卒尔ぶる生ハ難死ハ易急ぎ能
 吉と招き彼奴も熟得させ世間廣く女夫も去て進せんはと万借
 も吾も任せられよと推へ愈つ各八の表の間も熟睡する義子の久
 兵工呼起し草臥ていやらが苦勞さるる胸脉ととり声の下ろつと
 心得義子の久兵工急往熊吉を呼迎へ伴ひて飯りりる叔熊吉
 ハ各八膝のすくふ於て頭を畳と著て今宵の懇情を厚く謝され
 ハ各八が今更言で無きども你も當処の産といふもがう兩親ハ
 遠國の人と當処出生といふもがう亦喧嘩押借倭徒取
 ハ平生お許さぬ夏もはて縣官取も於て入牢も幾度うこれお依て

名主村役人も徳果て所と追拂ふべりこの儀も幾度う然るも
 が歎と伴て貰ひ故も今日追當所の住居も調てり竹う身
 の上其儀ハ云まともと逐一覚のつるべと云まて追の熊吉も
 一言ちく身と縮め尻口くと畏り居る重て各八の曰く夫
 ふ付ても先達ても言通り於梅の方へ無理無躰又躍込己の
 意も従つぬと撃ち擲夫も不届至極と馭の衆の評儀りるに
 彼が身も附る家田畑追て残らぬ賣立て己まが員博夾の種銀小
 ち可愛や木も落る猿も等と孤獨の一人婦人と悔り當
 時の不届長袖とごちの於梅と生疵の絶ぬやうとお擲て見兼ね取推
 挨拶も及べ却て逆捻も及び無理強情と働くと聞込られ畢竟



有馬茶八の
宅で喜八
於楳奇縁と
結ぶ

何われが義ごん子こといふを以もつて何なまも見み許ゆる有あらば何なが眼め鏡めがね外ほかま彼あつめ於あ梅うめ
 と申まを者ものと無理むり好この色いろの上うへ刺さす申まを上うへまは引ひ引ひ又また落おされて
 も云い釈しやくあつと始はじめ末すえ然しかも今いま宵よ我われ家かへ黍あはられ鎌か倉くらの客きやく人ひと於あ梅うめ
 の身みの上うへと聞きうと不ふ便べんと思おもひれ汝なんぢと諭さとすやまといふるや向むか後ご心こころ
 と改かめ身み持もちと直ただし於あ梅うめと大たい切きよと共とも亦またい今いま迫せまちうたる業わざ之これ
 直ただと直ただが出で來き兼かねるちう少すく々の種ね金かねとめりて於あ梅うめと美うつくく縁えん
 と切きて暇ひまとよと云い思おもはれ者ものの熊くま吉きちも今いま更さら返かへと詞ことばあく真まと
 俗ぞくあつと蛭ひる又また塩しほのてく一いち言ごんの返かへ直ただもちけま糸いと八はちが丸まるとれがよもや
 真ま直ただ人ひとあつちうちうまじと金かね子こ三十さんじゅう兩りやうと出でて先まづ達たつても過あや刻まじも你なんぢ
 がつて於あ梅うめが身みの代しろ金かね何なにが方かた娘むすめ又また買かひ切きりどよ其その旨あじ心得こころえて申まを

分わるは證しやう券けんと認まをよと透と許ゆる云いとて熊くま吉きちの思おもひ思おもひ廿にじゅう金かねと
 忽たち眼め暗くらみて糸いと八はちが丸まるのてく一いち札しやくと認まを下した形かたちと押お三十さんじゅう兩りやう
 と懐ふ鬼おにの首くびと伐きちりひは逸つ足あし出でしてぞ飯いりちり
 若わ宮みや小せう路ろ町ちやうは於あ喜き八はち煙えん草そう店てんと閑ひま話わ
 吉きち水みづの聖せいが你なんぢみ給たまへる誰たれもみら我われ身みと成なると思おもふべし命いのちと
 惜あはさりののと知しらるやといふ和わ哥かの意い実じつと理りるのりこそ聞き
 ろりされば糸いと八はちの思おもひ思おもひ熊くま吉きちとちう肩かたせき意いやとちうれ
 兩人ふたりといふは熊くま吉きちが認まをる證しやう券けんと見みせて斯かくのてく手てらふとれ
 向むか後ご世よ間ま暗くらく末すえ長ながく夫おとこ婦めかけと成なるべし即すなはち何なにが義ぎ女めかけと成なる
 祝いわ言ごの盃はち又また及および亦また此こゝ證しやう券けんの我われが名な宛あてられ預あづか置りべし入い用ようの

砌へ何時成とも取よ来るべしと言ふ喜八於謀ハ誠ニ頼りたる
 意地よく歡ぶ支限りなく伏拜嬉涙は形遂に格別夜の更ぬ内中
 祝言をすねびはし今宵ハ夜更これ吾方一宿といふたれども明
 出立も世間も有りなく旅駕をも千住迄送り其後何方成とも
 心任せ又夫婦中能暮し喜八ハ不思議の奇縁みて
 条八が厚ら情と歡の余り禮金とて二十兩紙を包て差出せば
 条八頭を左右に振舞金銀と受意とて御世話致され鎌倉
 とりゆく殊更頼母敷とも有りての儀をれ御縁も有らば
 重て面會致べし礼金といふ中々受ぞ格別夜更て如何と
 する意附くと義の言藏と郷導とて千住と急と三更すへ

江戸屋といふ万条八が知音の旅龍屋へつれ其夜いつあり
 夢や結る雞明ぬまび喜八ハ吉藏の苦と深く謝し条八
 夫婦へまゝ傳言となり鎌倉へと趣らる諸喜八ハ測らば
 も草加駅に於て於謀と見初恋の煩惱と暫し意と苦めらる
 幸と俠客条八が厚ら情に依て假初の同席とて互に心の底と
 明ののろ漆と漆は漆は悪縁と縋め兩人とも縋きて成とも此
 世の苦思と道と末来ハ必だ夫婦といひ約束覚悟究て兩人が既
 条八が縁より衷へ忍出死に及んと有りと疾も条八が聞知りて
 種々心配厚ら情に因て世間廣く夫婦の盃有て互に思ひあへ
 巫山の夢とて結片階老同穴の契浅く代駅駕又身と潜り

夫婦共々鎌府へ飯り着るべきも主家より預るの金子を以
 右の始末して主用と調て於梅と誘ひ飯りし支ゆへ主家へ憚り
 世間と畏きて雪の下餘湖山町の出店と遙く隔るる山の手若宮
 小路町より入るに於て九尺二間の表店と借受て刻煙艸の店と
 出して高と始り其身の態と主家へ遠慮有て障子の内
 居て煙艸と刻をどく店へ妻と任せて於梅へ店よりおわく葉巻
 及びびぬきさねさねさねと鎌府へ関八筋の諸侯亞役の邸館多
 く勤仕の夏をくれば非番休日の藩中等の遊行往來繁く頗る
 繁花もて三都隨一の都會ゆへ殊に男入多く婦人のゆき處の
 上殊更美婦人あり於梅が店へ居ての高故に尊高くこの

外繁昌及びび兩三年も無夏と打續繁昌及びびるぞ芽出
 られされども佛國禪師の覺て折得ても心ありとて山櫻誘ふ
 嵐の吹もこそをれやと他阿上人の歎ふ歎ふを江と飲ひ
 と求むべきこそ歎といはれと戒給ひて一年の秋の半喜
 ハハ始ハ風邪の心地を推て家業と官おとさども大熱
 強くあへ難く遂に枕と着るが追々又勞出く疾重く百
 療手と盡し醫師匙と投りける於梅の歎き外又杖便おれ
 身の悲さつらんうさく心の憂ひ殊更長の病氣ゆへ貯の金銀及
 衣類家具あども追々不賣代を夫の今抱真実と身と碎心と勞
 さらといへども詮方を茶俾の價と尽て路次遠れとも女

房於梅の横手が原の長谷觀世音へ泰病氣平愈と祈ると
 つく毎暮る家と出夫と包と朝比奈の切通 櫻の馬場
 ふ潜出往る人の袂と曳て情と高と出ることを衣さるるある人
 言葉より辻君の往来肌とふる布子妻の為の肩襷ふくこと
 云戯と哥のづく夫と思ふの誠心適貞女と賞とぐとされども
 伶俐の於謀ゆるる死火の客と曳て身の上の難儀の始終と泪
 と拭て歎きかたられば泪膽さ人の其負心至誠と感と身
 孤汚る憐の恵と情の施し不預夫の看病と息と死誠心の
 通と神や佛の憐と深さゆゑ堅さ氷の旭と解がづく日と
 追て木快よ及びれば於梅の欣悦び心勇長谷寺へ泰らうとどと

つくも心の念誦忘るし辻君ふ出て情の袂ふ紐る露の恵と以
 夫の今抱行届さ程さく全快よ及るるあぞ健あふ

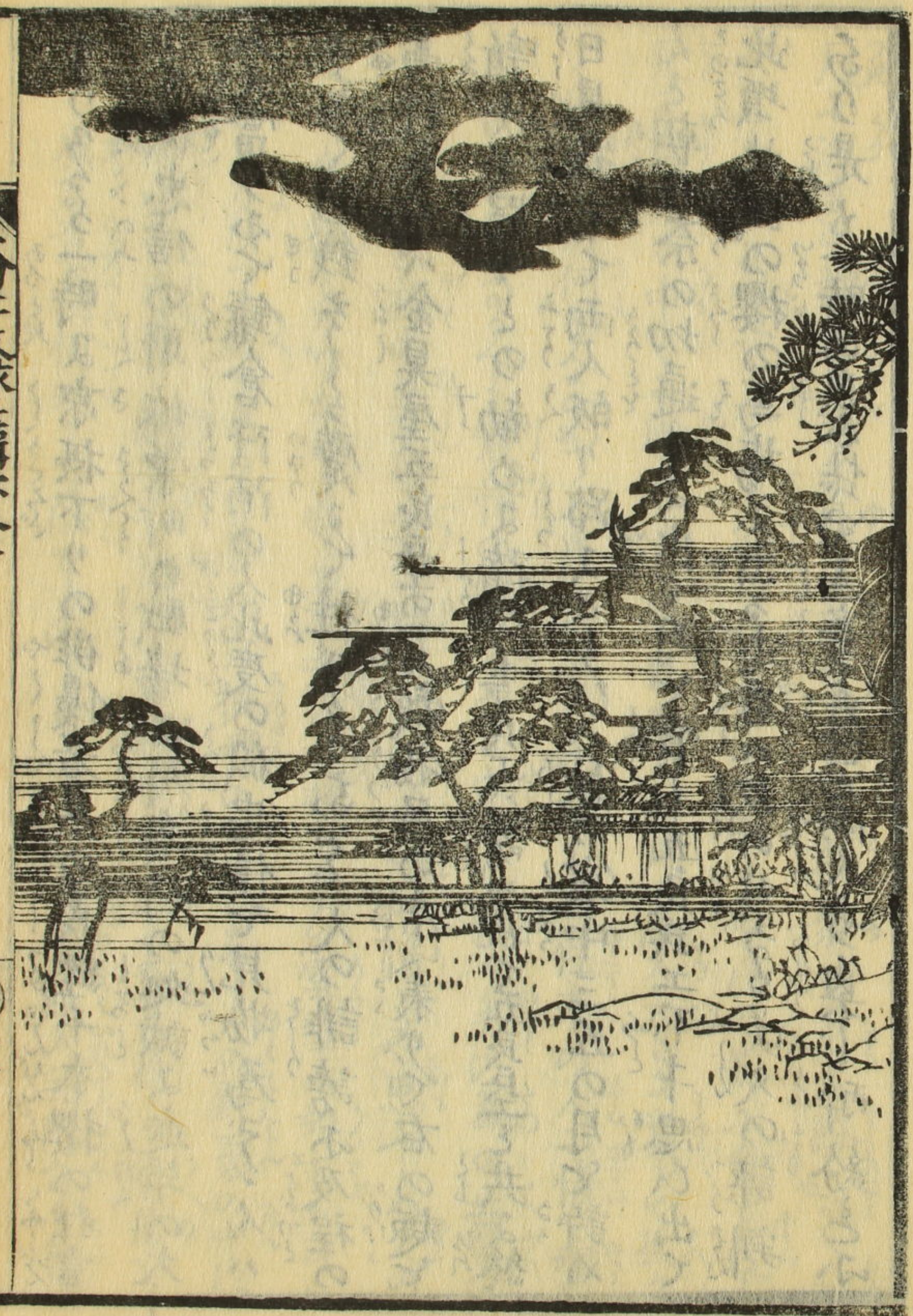
於梅辻君と出て紙囊と拾話

陰徳られれば必じ其樂と饗と以子孫と及とる叔も録府雪の下
 餘湖山町穀物屋店の支配人善兵衛去年の暮手代喜八は金子百
 兩持しめて羽呂南部路へ鮭の塩引と例歳暮の賣當買仕入の
 為と遣へたるまゝゆて便宜文通の素来師走月追よ及びても販
 らば其翌春も帰る哉と待あつる何の沙汰あく其まうて
 四五年の月日と送りても便宜さけまは勿論栗橋の本案へも此旨
 通達尋の書状を遣へれば主人吉九郎も兼知り大いふ

案ト如何せし哉若や道中ふ於山賊追利の為又金子と奪ハ
 之伐殺されや為つらんまへ深山幽谷と住ましく崖路より谷
 へ轉落て命と果せしむるや又ハ悪戯の為又哇殺されや
 為へん將船路又於て風波の為又大魚の餌食あへ成はせぬ
 姓質淳直よく正路を共徹し心の足ぬ処はる漠やく若や天狗妖
 魔又誘りて深山幽谷へ墮込らせざらうと歩寄る人の人々兎や
 角と評議しく案ト若く是又因て支配人善兵工殊の外苦勞しく
 喜ハの行衛と失ふて主人へ對して涙かきしと神や佛お祈り賣
 ト右よく考へるとれ命あは恙なく馳る便宜なり又又神仏
 へ御圍と揚て判断と見まへ命又障なく近日便有べしあど聞て

徹しへ安心及べども何分少も其まきして便り音信あはれ免
 や角と心配りたるを度ども時小支配人善兵工主人へ
 涙がくと心と勞しく始終不食勝よく何と形く病氣の血色也
 へ本家へも此趣相聞へ主人吉左門決しくさやうに心配及べ
 ち餘心配及及び若りの儀あふおめて我迷惑及及び儀あ
 ちへ必心勞不及及び代と懇又文通不及及とも善兵至て堅
 氣質あへ主人よりの文通と見て尚更又氣を兼て煩らる時小
 善兵工常親く交りらる四五軒西隣家ある金具屋五良兵
 工との家持町人又相應の身上柄の主人善兵工と年齢も大体ハ
 同年前後よく至く篤実家なりは善兵工と嚙相手よく断架

大竹二支録筆墨天二



千

於梅夫の為
に過君又出
て紙囊
拾ふ
図

大竹二支録筆墨天二



千

ちりちり一時又京振下りの俳優者某の義經千本櫻の狂言
 して狐忠信の所作栄町の戯場は於奥行の処誠は近年の大
 入大當りゆて鎌倉汗酒の人此度の狐忠信を見物為ざらんハ
 よくくの銭をうら度よく往ざらんあざ人の誹謗小及程の
 高評をれば金具屋五良兵衛の一日穀物屋の店へ来りて右の趣と
 断は段々との勧めは随ひ善兵衛に誘われて五良兵衛と共に終
 日見物有て兩人飯り路はこよひへ秋の寂中三五の月と許め
 んと朝比奈の切通しは出て月と賞と五良兵衛不才思ひ出て
 此頃此側の櫻の馬場へ出る辻君へ以の外なる美人の評判
 あり是も一時の真おれはゞゞ寄て着くと兩人亦奥で酔紛と小

月小浮まで櫻の馬場は往は真黒は人の群聚せる中へ紛込る面
 入のやうくは是と見え立姿の尋常めて賤しは月影小貞と透し
 見え其美さ中々は勝まて眉目をうと見て兩人大きく賞と彼が
 どれ美人の何ゆゑかろ浅ましく辻君と往來の人小情と驚
 哀哉貧ゆへるるる寂惜の婦人する定めく親う夫の為の苦累
 運命貧福といつちがう不幸は是非もたれ雲華の始末うのと
 歎息は及びつて飯りりるが善兵衛は彼櫻の馬場ある人の群聚の中に
 於て懐中小入置し紙囊と階せしう將巾着盗は奪りけり家居と
 近く成て意附何地と階せしやともまは勿論紙入并内なる金

惜不足ねども要用の書附多く入置らる叔々残念なる度とふ
 一たつとつまゝとび悔とてぞ家又歸りけり斯て於梅へ夜更て
 人絶ふ及びむれが家居小飯らんとて辺と行附見巡りたるふ不斗
 月明り又見まゝ古びたりと見ゆれども白羅紗の表とて裏地の
 白茶の古金襴の紙囊の何角諸書附のむらゝ程數多く入らる
 と拾ひ揚て是はいつとる人の落さるや定めて迷惑よ及び嘸搜
 一しん万乞持主と歸り渡したるもわらふまじどかゝ寂賞馬場尙
 時尋搜又来らんも知まじとまじり待りも難儀なりと心むら
 も於梅へ彼紙囊懐又又明夜自然又其人の索来らんも知まじ
 とおもひて持歸り夫喜八又長谷寺の門前と拾はる夫の落

ぬいの来りやとんと暫し待てれども来らざるがゆへ不持飯
 まうといつて夫喜八又見せられ夫の氣毒ちり嘸落したる人の
 迷惑なりとつて手小振て是と見まじ見覚のある金物
 とて裏表の地合の花紋叔々ありて不審なる中と見小穀
 物屋善兵工名當の書翰數通又木家栗橋の主人の手跡の書附
 等數紙有は是はく如何は此紙入何地何方と拾ひ哉と問ま
 へ於梅へ直は櫻の馬場とも云はる寂前より通り長谷寺の
 御門前とて聞て喜八の諾ら此紙囊の袋が年頃遣り侍
 らる穀物屋出郭の支配人善兵工主の取持たり能も休の
 手に入不俵が持泰と飯一進せむ意海む他人あはるを

其まゝあても苦くかしく成ども不倭又於て知らぬ顔も海江
と諾度、白晝へまうり右翌夜喜八の病氣揚りあて力つる歩行
もひんぐぐれども漸と杖もこぼりて雪の下ある出店迄五十餘町
の路次を月明り杖又縫りてたどりぬるぞ殊勝なり

喜八恩人善兵衛の紙囊と飯話

恩と戴て恩と知ぐらん樹木の鳥の枝と枯もど如くとうやとれ煙
艸屋喜八の病後氣力も附む呼吸苦くくらくと杖を
かゝ雪の下餘湖山町より金具屋五良兵衛の戸はくくとお
擲山の手辺の者ちりとくぬ敷早初更過の夜をねが奴婢へ寝入る
がれば主人五良兵衛立出戸を関さくたきやんと者ども姿変へ喜八

ゆへ誰人と見定め兼何人をも何用有て来らるゝの喜八土又両手を
き御見忘もつらん先年此近辺又勤めし喜八と候と名乗む五郎
兵衛とて手と歩面影めらり殊又死せしと半思ひし者先ハ無変と
よりりりるを内へ伴い一別以来の挨拶終出羽南部路へ先年赴くの
砌下絶國草加駅又於ての始末と侘旁小歎物語茶八といふ
侠客の世話とて當時女房小仕りと落もたき身の上の載悔
み及びて昨夜女房ある者拾ひし紙囊細中を見むといふも
書附を見て善兵衛主の紙囊と知るに至るは病後未氣力調
り歩行も呼吸苦くくれども外さく厚く恩と受居る意
ふ背る百金と我物負せし罪の候と出んと思へども能折柄



ちぢりぬ心あらずも年月を送りて今夜の時宜と
 お五良兵工の途中於て死な果しと思ひ切つる喜八が存命
 ほど一五千の長物語聞ふびくも或い嘆ト又ハ衣を催し殊
 又支配人善兵工が紙入と知りて遠路持参の眞實と大に
 賞ト感心及び他の人が拾ふべき其まゝも足下の手に
 納べを再び取飯たりといふ良縁も有り此紙入は善兵工
 どの大心配要用の書附多く勿論某が無理小栄町の戯場へ同
 道の歸は落されしが一人氣毒ふおもひ居るは量り
 足下の手に入持来らるゝ一懇志の布と黍一有が
 善兵工の癖症と慰めんと栄町の芝居と無理な誘ひ見物の

飯り小羽々あり噂の高き櫻の馬場小出る辻居美人の大評判ゆへ
 是も酒の上の一奥と余処るが一面會ふ及び人群聚の中於て落
 される紙入を然ると長谷寺の門前よりよほど方角ちぢり也
 と不審くおもひ居る時喜八も不審の眉心得がくおもひ
 つらつらが五良兵工の心の内づく悟り扱ひ此紙囊と足下の内室
 暫く思索つて年齢貞形衣服の鳩柄骨法とさす扱ひ足下
 内室の夫の爲は辻居の苦界と見らう天晴の貞婦も痛みの始
 末のよとらまらび歎息も及び扱五良兵工の喜八が住居の町外家名
 小委しく書止るこよひの寂早二更過るれば明早々此紙入と善兵
 工王又渡とべりと厚く謝して喜八が爲躰氣毒ふ黄二方出

是よりして駕籠も来て飯をべしと恵むるが喜八の思ひがけ
く黄歩で恵まれ嬉々限りなく杖おしりて若宮小路町
へて飯りりる杖於梅又金物屋へ金子と恵まるとして見せ
て共々飲びよりる叔聖且早々五良兵工の穀物屋の店へ来り
善兵工と對話有て昨夕存知りて喜八どの見へられと亦々
審まののぐろの上足下が落され紙入と持参りて亦々
喜八が惚る処と以委細と断りこれ善兵工聞て驚き杖の喜八
の命恙きく有りとの借もく飲一成程王用と出て其用も達
せ其金子と扱す皆無とせし不届至極な美人と見初て心
恍惚くして是が為る尔々との申訳たの直きり勿論弱輩者あ

随分有べし直きり外に不調法とて喜八を國元の若主人の爲
る命の親をれば何条百金貳百金位の直へ此大身上は於て誠
に風前の塵なり其上は紙囊と拾ひりてと病苦の厭もさく遠路の
処より杖と縋りて持参の志過分とも謝するの詞を去りて
彼辻君といふが喜八の妻とてりりるよあ彼が妻は夫の為ふ夜毎々
々長谷寺へ本復の祈願と偽り長の間苦思の夜發勤り
て夫と身養とハ誠は貞婦とも賞とべし助がれりるべから
先吾寸志と以て恩と送らん追日も國元へ此趣と通達し
て主人の事いと待べしと善兵工ハ五良兵工同道めてるく
若宮小路町へ素性喜八と對面有てはりる山々の談話の上

相めりては、そなた 你的実心と感^ん、あつ 勞と謝^し、かみ 紙囊の礼として、い 金
 五兩病氣見舞かゞとて、や 惠されれば、あつ 夫婦の誠と手の舞
 足の踏処と覺ぞ、うれ 嬉し涙は、あせ 嘆びたる善兵工の曰先、い 當座此金
 子と以凌^じ、く 君の苦思は止^ま、い 来と制止^し、あつ 及び百金と我まふ
 遣捨^す、い 罪なりと人ども、い 以前の忠節より、あつ 許され却て若主
 人の為^め、あつ 命の親ありと恩有^り、い 忠なりと賞^う、い 國元の便宜と樂^し、あつ 相
 待^ま、あつ 後見と慰^む、あつ 兩人へ機嫌よく別^れ、あつ 告^げ、あつ 飯り多^し、あつ 誠^し、あつ 陰德
 の^{あつ}、あつ 陽報ありの理と、あつ 聞えり

近世 大川仁政録羣輯卷之二終

